

川崎市の小・中学校における鑑賞教育の現状と課題

— 「鑑賞の能力」を高めるための、
小・中学校9年間を繋ぐ系統的なカリキュラムの工夫 —

図画工作・美術科研究会議

中島 香¹ 大高 修² 北村 健太³ 緑川 葉子⁴

要 約

美術教育の中で「鑑賞」の領域に対する取組は、その性質や歴史的背景、時間数の削減、評価の難しさなどから、「表現」の領域に比べ圧倒的に少なかった。近年、学習指導要領において「鑑賞」が一層重視されてきたことから、意識的に取り組まれるようになってはきたものの、依然として課題を抱えたままであり、取組が難しい状況は続いている。また、子どもたちが何をどこまで学習したのか、どのような鑑賞の能力が身につけているのか、発達段階を踏まえてどのような点に留意し、どのように指導すべきなのかなどを具体的に理解できる手立て等が不足していることから、「鑑賞の能力」の育成に差が生じるといった課題も見られる。そのため、本研究会議では、川崎市の鑑賞教育の現状を把握するとともに発達段階に即した具体的な学習内容や手立てとして共通に理解できるものが必要と考え、「小・中学校9年間を繋ぐ系統的なカリキュラム編成のためのガイドライン的役割となるものの提示」を目的として研究に取り組むこととした。

本研究は、①発達段階に応じた身につけさせたい「鑑賞の能力」とその題材例を提示する。②アンケートと年間指導計画による実態調査とその分析によって明らかになった課題に対する具体的な手立てと題材例を提示する。③研修員による授業実践と課題に対応する題材と川崎市の特色を生かした参考資料等のデータを収集し、それらの活用方法を研究して提示する。という3つを中心に研究を進め、「モデル表」を作成して提示した。

研究を通して、鑑賞の授業が積極的に取り入れられることで、図画工作・美術科の多くの課題は解決可能であるということが見えてきた。また、時間数の削減などによる取組の困難さも、本研究において試作したモデル表を活用して内容の重なりや系統性の押さえのない題材を整理することにより、合理的かつ効果的にカリキュラムを組み立てていくことで改善の方向に進むことが期待できると考えた。

本研究は鑑賞学習の課題に対して取り組む入り口に立つものであり、今後この研究をさらに進め、提案に基づく実践を重ねながら検証していく中で、よりよい鑑賞教育をめざしていく必要がある。

キーワード：鑑賞の能力、現状と課題、発達段階、系統性、カリキュラムの編成、モデル表

目 次

I 主題設定の理由……………82	(4)資料提示の構想……………91
II 研究の内容……………83	(5)ガイドライン：モデル表提示……………92
1 研究のアウトライン……………83	作家・作家作品」アンケート結果一覧表
2 研究方法……………83	III 研究のまとめ……………95
(1)アンケートによる実態調査と分析……………83	1 研究から見えてきたこと……………95
(2)年間指導計画の題材（単元）設定 による鑑賞学習の調査……………86	2 今後の課題……………96
(3)題材例・参考資料などのデータ収集 研修員による授業実践例……………87	参考文献……………96
	指導助言者……………96

¹川崎市立白山中学校教諭（長期研修員）

²川崎市立日吉小学校教諭（研修員）

³川崎市立生田中学校教諭（研修員）

⁴川崎市立子母口小学校教諭（研修員）

I 主題設定の理由

川崎市総合教育センターでは、「豊かな学びをはぐくむ川崎の教育の創造性—共生を軸にして—」〈自ら学ぶ〉「共に学ぶ」〈学び続ける〉という総括主題を掲げ、研究を進めている。本研究会議では、美術教育の視点からその趣旨をとらえ、教科の課題からこれに取り組むこととした。

指導要録の観点別学習状況による図画工作・美術科の評価は、1) 造形（小）・美術（中）への関心・意欲・態度 2) 発想や構想の能力 3) 創造的な技能 4) 鑑賞の能力の4つであり、領域区分は、「表現」と「鑑賞」となっている。目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）の導入により、各観点を踏まえた具体的な目標の設定とその達成状況の評価が求められ、様々な研究が行われている。しかし、「鑑賞」の領域に対する取組は、その性質や戦後の日本における鑑賞教育の流れや時間数の削減、評価の難しさなどを背景として、「表現」に比べ研究対象に挙げられることが圧倒的に少なかった。近年、学習指導要領において「鑑賞」が一層重視されてきたことから、以前に比べれば意識的に題材の開発に取り組まれるようになってはいるが、それらの題材等を「鑑賞の能力」をはぐくむという視点から発達段階を踏まえて系統的につなぐ試みは依然として不足している。

「鑑賞の能力」は、他の教科や図画工作・美術科における表現領域とは異なり、身につけさせたい力は理解されてはいても、具体的にどの学年で何を身につけるのかが見えにくい現状がある。そのため、児童生徒の制作作品による鑑賞のみの学習になってしまったり、美術史的授業を数回行うだけにとどまったり、参考作品として提示するだけの扱いに終始してしまったりするなどの授業になるおそれがある。また、一方では、多くの作家や作品と出会えたり、興味・関心や知識が深まる中で好きな一枚の絵に出会えたり、表現と鑑賞を関連させた造形活動の取組が経験できたりする授業を行っている学校や学級もある。こうした状況では、児童生徒の「鑑賞の能力」の育成という点で大きな差を生じさせてしまうおそれがあり、避けなければならないと考える。

図画工作・美術科における「鑑賞教育」においてははぐくまれる力は幅広く、様々な能力に繋がっていく。鑑賞するという行為は、対象と出会い、見る、感じる、知る、思考することなどから、児童生徒の様々な能力を刺激して高めるとともに、感性や情操、探究心や創造性を豊かにする。さらに、資質や能力、家庭環境などの異なる子どもたちが集まる公教育の中で鑑賞教育を行うことにより、多様な感性や価値観などに触れ、他者理解を深め、広い視野で思考する力、ものを尊ぶ心などが豊かになっていくと考えられている。社会がめまぐるしく変化し、心の問題や人としての生き方が問われている現代において、人間の根本にある創造性や感性、情操をはぐくむ上で、図画工作・美術科教育における「鑑賞教育」の意義は極めて大きいといえる。

このような美術教育における鑑賞教育の課題と意義を踏まえ、本研究会議では、川崎市の鑑賞教育の現状を探り、そこから見えてくる課題に対して、どのような対策を考えていくべきかという点に研究の視点を定めた。また、小・中学生の発達段階に応じて求められる「鑑賞の能力」を育てるための課題を明らかにし、身につけさせたい能力に応じた小・中学校9年間の系統的なカリキュラムの編成等についてのガイドラインとなるべくモデル表の提示を最終の目的とし、次の研究主題を設定した。

研究主題

川崎市の小・中学校における鑑賞教育の現状と課題

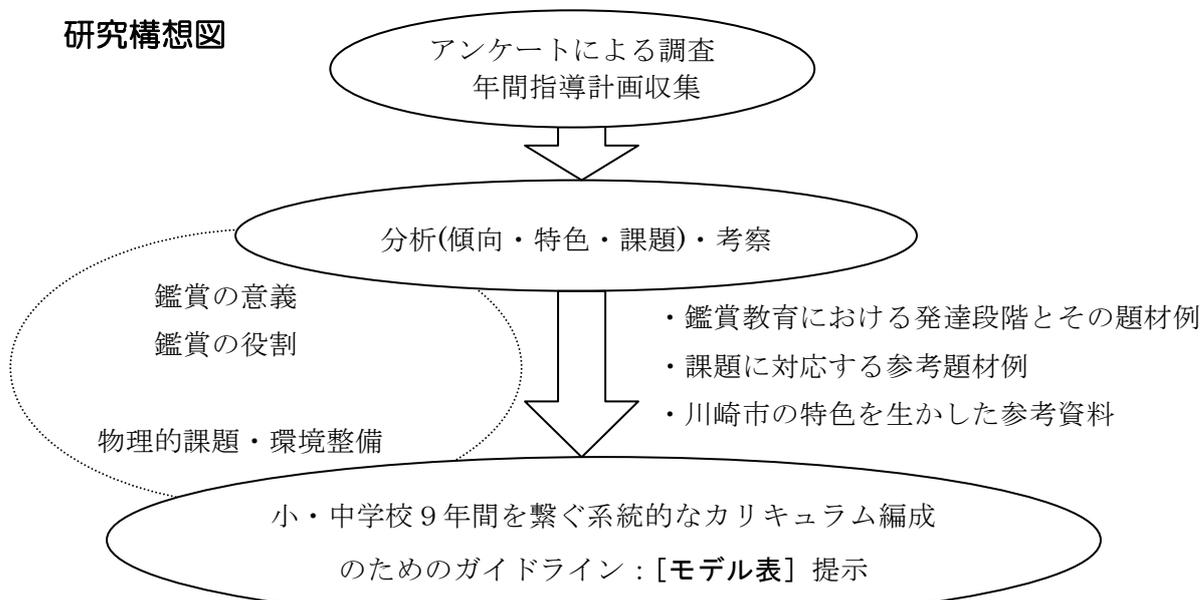
「鑑賞の能力」を高めるための、小・中学校9年間の繋ぐ系統的なカリキュラムの工夫

II 研究の内容

1 研究のアウトライン

- ① 研究主題の設定
- ② アンケートによる調査に関する準備（市内全小・中学校対象）
- ③ 「鑑賞学習に関するアンケート」の実施と年間指導計画の収集
- ④ アンケート結果と年間指導計画まとめからの分析と考察
→川崎市の鑑賞教育の現状（傾向、特色、課題など）の把握
- ⑤ 題材例と参考資料などの収集
題材例に組み込む、研修員による鑑賞授業実践による研究
- ⑥ 『「鑑賞の能力」を高めるための、小・中学校9年間を繋ぐ系統的なカリキュラム編成』
のためのガイドライン：モデル表(以下モデル表とする)の構想と検討
- ⑦ モデル表の提示
 - * 発達段階に応じた身につけさせたい「鑑賞の能力」と、その「題材例」の提示
 - * 課題に対応する参考題材例の提示
 - * 川崎市の特色を生かした参考資料の提示

研究構想図



2 研究方法

(1) アンケートによる実態調査と分析

児童生徒と教師の鑑賞学習に関する意識や取組の様子などを知るため、アンケートによる実態調査を川崎市内の全小・中学校を対象として、地域や学年の偏りが無いよう一定の割り振りにより調査対象学年を定めて実施した（回答校数：小学校 93 校／全 114 校中、中学校 39 校／全 51 校中）。以下、集計の結果を項目ごとに分析する。 [【アンケート結果：ここをクリック】](#)

【児童生徒】

① 児童生徒が知っている作家や作品、好きな作家や作品【p. 94 表 A 参照】

- ・ 知っている作家については、小学校 1 年生から中学校 3 年生まで、同じ作家の認知度が高く幅がない。好きな作家については、同じ選択肢から一人を選ぶようにしたところ、上位に挙げられている作家名は認知されているものとほぼ一致するが、「いない」という回答がかなり多く、2～4 番目にあがってくる。
 - ・ 中学生のみに調査した「知っている作品」については、3 年間ほぼ変化が見られない。また、「好きな作品」については同じ選択肢から一つを選ぶようにしたところ、作家と同様に「ない」という回答が多く 1、2 年生は 2 番目に、3 年生は 1 番目で 23% となっている。
- ⇒ 知っていることが好きな作家や作品と繋がっていくことにはならないという現状がある。

② 鑑賞授業への興味・関心

- ・ 鑑賞の授業が好き（小学生）、興味がある（中学生）は、「とても好き（とてもある）」「少し好き

(少しある)を合わせて、小学校1年生から中学校3年生のどの学年でも60%以上が「好き」または「興味がある」と示している。中でも小学校低・中学年が高く80%近い。

- ・ いろいろな作品を見たいと思う児童生徒は、「とても思う」と「少し興味がある」を合わせて、小学校1年生から中学校3年生のどの学年でもそれぞれの回答数の60%以上を示している。さらに、友達作品への興味は高くなっている。
- ・ 鑑賞の授業を受けて作品作りに生かされたと思う児童生徒は、「よくある」「時々ある」を合わせて、小学生はどの学年でも60%以上、中学生では50%以上を示している。

⇒ 全体的に鑑賞授業や作品への興味・関心は低くはない。

③ 図画工作・美術科における「好きな」「興味のある」分野・領域

- ・ 小学校では、「工作」が圧倒的に多く、続いて「図画(平面)」となり、「鑑賞」は全体の3~7%と最も低い。中学校では、好きな分野(領域)の偏りはあまり大きく見られなかった。

⇒ 小学生が「鑑賞」を示さない理由として、鑑賞授業が少ないことや学習内容がわかりやすい「表現」と異なり、「鑑賞」を授業として取り組んでいるという認識が曖昧になりがちだということも考慮して読み取る必要がある。

④ 「美術館などの利用」「美術・図画工作に関するテレビ番組視聴」状況

- ・ 1年間に美術館や展覧会などに全く「行かない」児童生徒は、小学校1年生から3年生と、5年生から中学校3年生のそれぞれが回答数の51%以上である。中でも小学校1年生が最も利用が少なく68%となっている。小学校4年生は「行かない」と答えた児童が45%で、美術館などの利用が最も多い学年となった。
- ・ 美術・図画工作に関するテレビ番組の視聴では、小学校は「よく見る」「時々見る」を合わせて低学年が46%、中学年が63%、高学年が51%視聴している。中学校では、31~34%と小学生に比べて低い。

⑤ 鑑賞授業などにより高まったと感じる力

- ・ 『鑑賞の授業によりものの考え方や見方、感じ方が広がったと思う』児童生徒は、「とても広がった」「少し広がった」を合わせて小学校低・中学年では67~73%、小学校高学年から中学生では55~62%となった。

教師は、児童生徒よりも意識が高く、鑑賞の授業により児童生徒のものの考え方や見方、感じ方が広がったと感じている。特に中学校の教師と生徒の間の差が大きい。

- ・ 『身の回りにあるもののよさや美しさなどに気づく方だと思っている』児童生徒は、「よく気づく」「少し気づく」を合わせて小学校低・中学年では76~77%、小学校高学年から中学生では51~57%となった。

教師は、小学校では児童との意識の差は少ないが、中学校では教師の意識は高く、かなり生徒の意識との差が生じている。

- ・ 『いろいろなものや出来事に感動する方だと思う』小学生は、「とても感動する」「感動する」を合わせて63%以上を示すのに対して、教師は56%と下回っている。中学生は、62%以上を示し、教師も73%と生徒の意識に近い。

- ・ 『身の回りにあるものを大切にしよう」と心がけている』児童生徒は、「とても心がけている」「少し心がけている」を合わせて80%~89%とかなり高い。

反対に、『児童生徒が身の回りにあるものを大切にしよう」と「思う」または「多少思う」と感じている教師は、小・中学校合わせて37%とかなり低い。

- ・ 『身の回りのものや生活の中に美しさや機能を生かすようにしている』児童生徒は、「はい」「少ししている」を合わせて小学校低・中学年では69~72%、小学校高学年から中学生では39~56%となった。

教師は、小学校では児童より低く、中学校では生徒より高くなっている。

⇒ 「児童生徒の認識」と「教師の児童生徒の見取り」の間に差が見られる。

『身の回りにあるものを大切にしよう」と心がけている』以外では、小学校高学年から意識の変動が明確に現れている。

⑥ 制作した作品の保存状況

- ・ 『自分の作った作品が家に飾られている』小学生は57~64%、中学生は44~53%となっている。
- ・ 児童生徒が、今までに作った作品を「すべてとってある」「気に入ったものだけとってある」を合わせると63~76%と保存率が高い。

⇒ ⑤の『身の回りにあるものを大切にしよう」と心がけている』児童生徒の回答結果と合わせてみると、自分のものを大切にしようとする意識は高いことがわかる。

⑦ 作品展示による効果と展示方法

- ・ 自分の作品が展示されて「とても自信につながる」「飾られてうれしい」と思う児童は、小学校1年生の83%から5年生の67%まで、学年を追うごとにほぼ段階的に減少している。特に小学校6年生からは51%と急減し、中学生の52~57%につながっていく。しかし、「作品によっては飾ってほしくない」(=自信のない作品を飾られるのは抵抗があるが、それ以外は飾ってほしい)を含めると、展示効果はかなり高くなると考えられる。「飾ってほしくない」はわずか5~12%であり、かなり低い。

- ・ 作品展示では、小学校は93%が全作品展示。中学校は、全作品展示は35%、教師の意図に基づいて選んだものみの展示が65%となっている。また、展示方法は小学校56%、中学校59%が「教師が展示する」であり、児童生徒が関わるのは「児童生徒が展示する」「児童生徒と一緒に企画展示する」を合わせて小学校では19%、中学校では34%となっている。

⇒ 小学校高学年からの展示については、「作品によっては飾ってほしくない」が増える。⑤の『鑑賞授業などにより高まったと感じる力』の中でも見られた、美術の発達段階で見られる思春期の特徴がはっきりと現れている。

⑧家庭の美術

- ・ 家にどのような美術品を飾っているかについては、小学生では「写真」、続いて「絵画や人形・壺などの工芸品」が多く、中学生では「飾らない」が最も多い。

⑨生活（生涯学習）に対する鑑賞授業の役割についての認識

- ・ 「鑑賞の授業はこれからの生活に大切だと思う」と感じている小学生では「はい・どちらかと言えば思う」を合わせて72～87%。中学生では「とても思う・少し思う」を合わせて60～72%であり、共に意識は高い。

【教師】

①児童生徒に理解して(知っておいて)ほしい作家や作品

- ・ 児童生徒に知っておいてほしい「作家」では、「ピカソ、ゴッホ、ダ・ヴィンチ、葛飾北斎」が上位(20%以上)で共通している。小学校では、「岡本太郎」がピカソに並んで多い。
- ・ 児童生徒に理解して(知っておいて)ほしい「作品」では、ゴッホ「ひまわり」、葛飾北斎「富嶽三十六景」、ピカソ「ゲルニカ」、ダ・ヴィンチ「モナ・リザ」「最後の晚餐」、などが共通して挙げられている。また、小学校では岡本太郎「太陽の塔」が一番多い。

②授業で多く扱った作家・作品、鑑賞の分野・領域

- ・ 小学校では、教師がいままでによく扱った「作家」と児童の認知度の上位「岡本太郎、ピカソ、ゴッホ、ダ・ヴィンチ」などはほぼ一致するが、教師の扱いでは「ダ・ヴィンチ」より多かった「星野富弘、葛飾北斎」は、児童の認知度ではそれほど高く示されていない。また、児童の認知度は高いが、教師の扱いが高くなかったのが「手塚治虫」となっている。

- ・ 中学校では、教師がいままでによく扱った「作家」と生徒の認知度は「ピカソ、ゴッホ、ダ・ヴィンチ、葛飾北斎、ムンク、モネ、セザンヌ、岡本太郎、ロダン、ミケランジェロ、安藤広重、ルノワール」などがほぼ一致する。「マグリット、エッシャー、スーラ、シャガール」などは教師の扱いは高いが、生徒の認知度はそれほど高くない。教師の扱いは高くないが、生徒の認知度は高いと思われるのが「雪舟、喜多川歌麿」などとなっている。

- ・ いままでによく扱った「作品」では、小学校では岡本太郎「太陽の塔」、ゴッホ「ひまわり」、葛飾北斎「富嶽三十六景」、ムンク「叫び」、ピカソ「ゲルニカ」、モネ「睡蓮」、ミレー「落穂拾い」などが挙げられている。

- ・ 中学校ではピカソ「ゲルニカ」、ゴッホ「ひまわり」、葛飾北斎「富嶽三十六景」、ダ・ヴィンチ「モナ・リザ」、ムンク「叫び」、モネ「睡蓮」、マグリット「大家族」、ダ・ヴィンチ「最後の晚餐」、スーラ「グランド・ジャット島の日曜日の午後」、ロダン「考える人」などが扱われている。生徒の認知度と一致しているものは、ダ・ヴィンチ「モナ・リザ」「最後の晚餐」、ムンク「叫び」、ロダン「考える人」、ゴッホ「ひまわり」、ピカソ「ゲルニカ」、葛飾北斎「富嶽三十六景」などである。また、扱いは高くないが、生徒の認知度で25%を示しているものとして「ミロのヴィーナス」がある。

- ⇒ 教師の「知っておいてほしい作品」と授業で扱っている作品はほぼ一致している。作家や作品との出会いは、メディアによる影響が大きいですが、教師の扱うものの影響も大きい。また、他教科で学習したものの影響もある。

③美術館などの利用状況

- ・ 市内や地域の美術館などを行事や授業、宿題などで全く利用していない教師は、小学校66%、中学校48%となっている。

- ⇒ 中学校で「年に一度は利用している」が40%を示しているのは、夏休みの宿題などによる利用からと推測される。

④生涯学習としての有効性の認識

- ・ 鑑賞授業で生涯学習につながるような工夫をしているのは、小学校では「はい」「多少している」を合わせて31%、中学校では69%となっている。

⑤鑑賞学習の位置づけ

- ・ 鑑賞学習の位置づけとして「①年間カリキュラム ②授業内鑑賞学習 ③環境を生かした鑑賞学習 ④⑤⑥をバランスよく行う」において、小学校では②の鑑賞スタイルが30%、続いて④が29%となっている。また、鑑賞の授業をカリキュラムに取り入れていないが9%となっている。中学校では、バランスよく行う④が49%と半数近く、続いて②の鑑賞スタイルが41%となっている。

- ⇒ 小学校では、教科書に合わせた既成の共通したカリキュラムを利用している割合が高く、④が多くなるものと考えられるが、実際には参考作品の提示や友達作品鑑賞会のみとなりやすい②のスタイルとほぼ並んでいる。これは、時間数確保の難しさや知識不足の不安などからくるものと考えられる。

- ・ また、鑑賞授業を「積極的とはいえないが取り入れている」と答えている小・中学校の教師は、平均して72%と高く、積極的な鑑賞授業への取組意識はかなり低いことを示す。([教師]⑨参照)

⑥鑑賞の資料として多く使用するもの

- ・ 小学校では教科書。中学校では資料集、続いて教科書、映像。

⑦「日本の美術」や「諸外国の表現の違い」の授業への取組状況

- ・ 「日本の美術」では、カリキュラムに特に組み込まないとしているのは、小学校が28%、中学校が2%となっている。「諸外国の表現の違い」では、カリキュラムに特に組み込まないとしているのは、小学校が60%、中学校が28%となっている。

- ⇒ 教科書に沿った既成の年間指導計画の活用が多い小学校では、指導要領に「我が国や諸外国の親しみある美術」といった表記が高学年からのため、「特に組まない」と答えたのは低・中学年担当者によるものと考えられる。高学年の取組が中心と考えても「諸外国の美術」への取組はかなり少ない。質問に「諸外国の表現の違い」としたことからの可能性も考えられる。

- ・ 中学校での「日本の美術」への取組は多いが、生徒の知っている作家や作品に挙げられるものは限られていて数少ない。【p.94 表A参照】

⑧不足と感じる鑑賞の能力

- ・ 小学校課程終了時点で不足していると考えられる鑑賞の能力は、感性・情操(小学校教諭のみ回答)
- ・ 義務教育課程終了時点で不足していると考えられる鑑賞の能力は、興味・関心(中学校教諭のみ回答)
- ・ 中学校教諭から小学校段階に求める鑑賞の能力は、興味・関心(中学校教諭のみ回答)
- ・ 小学校教諭から中学校段階に求める鑑賞の能力は、感性・情操(小学校教諭のみ回答)

⑨鑑賞授業の課題ととらえているもの

- ・ 小学校では、「児童が制作した作品での鑑賞会のみになりがち」を課題と考えている教師が 67%、続いて「評価がしにくい」46%、「知識不足」41%となっている。
- ・ 中学校では、「時間がない」46%、「教材に手間がかかる」「知識不足」「評価がしにくい」がそれぞれ 34%、続いて「生徒が制作した作品での鑑賞会のみになりがち」27%となっている。

⑩ (鑑賞授業により高められたと感じられる児童生徒の力 → [児童・生徒]⑤参照)

⇒ 小学校の教師の数値は、担当学年別の調査数値でないため、中学校と単純に比較できない。

⑪ (児童生徒が制作した作品の展示方法 → [児童・生徒]⑦参照)

アンケート結果からの考察

今回の調査結果から、教師の鑑賞授業への取組に消極性が読み取れるのに対して、児童生徒の鑑賞学習への興味が比較的高いことがわかる。しかし、その児童生徒の認識に比べ、好きな分野・領域としての「鑑賞」の割合は少ない。また、好きな作家や作品が「いない・ない」といった回答も多く、教師側の取組に対する大きな課題が示されたといえる。さらに、「鑑賞授業などにより高まったと感じる力」の各問いに対して、教師と児童生徒の認識の間の差が目立った。この差の意味するところを探り、授業や評価の改善に取り組む必要がある。今回の調査から、教師の鑑賞学習への意識を高めることや学習内容を見直すこと、課題に対する具体的手立てを示していくことなどの必要性が明確になった。

(2) 年間指導計画の題材(単元)設定による鑑賞学習の調査

川崎市における鑑賞学習の実態をカリキュラムの視点からも探った。アンケート回収と同時に各学校の年間指導計画を収集し、年間指導計画上で鑑賞の授業を題材(単元)設定として示しているものを小・中学校別にまとめた。(回答校数：小学校 83 校/全 114 校中、中学校 31 校/全 51 校中)

年間指導計画のまとめからの考察

[【年間指導計画データ：ここをクリック】](#)

小学校では、教科書に準じた既成の年間指導計画の適用が多く見られた。これは教科担任制ではなく様々な教科指導をすることなどが理由と考えられる。したがって、年間指導計画の上では鑑賞学習への取組は比較的多い。しかし、実態調査からは、実際に取り組むことが難しい状況や鑑賞学習の内容に課題があることなどが読み取れる。また、既成のものを利用しているため、美術館等の利用や市内の児童生徒作品展などの鑑賞学習への取組は少ない。さらに、多くの教師が鑑賞の資料を「教科書」としている小学校では、既成のカリキュラム題材を応用したものに変えたり、オリジナル題材を組み込んだりといった工夫をしなければ、作家作品との出会いの機会が少なくなってしまう。

中学校では、鑑賞学習を年度当初のオリエンテーションや夏休みの課題として取り組ませているものが多く、時間数の少なさなどによる取組の厳しさが浮き出ている。小学校と同様に美術館等の利用や市内の児童生徒作品展などの鑑賞学習への取組は少ない。また、個々の作家や作品についての題材が少ないことや「日本の美術」に関する取組の多いことなどが特徴として挙げられる。しかし、比較的取組のよい「日本の美術」の鑑賞学習に対して、実態調査の「知っている作家や作品」「好きな作家や作品」に日本の作家や作品はあまり挙がっていないという結果があり、学習内容の見直しが必要となってくる。これらのことから、年間指導計画の調査からもカリキュラムの工夫や題材設定、学習内容の見直しなどの必要性が明らかとなった。

* 研究内容（１）の実態調査と（２）の年間指導計画の題材（単元）設定による鑑賞学習の調査から、教師が取り組むべき視点を小学校と中学校ごとに次のように整理した。〔モデル表Ⅲに活用〕

【 小学校 】

- ① 知っている作家に幅が見られない。
- ② 「好きな作家がない」が多い。
- ③ 鑑賞することへの興味は高い。
- ④ 好きな図画工作の取組は、「工作」「図画」が多く、「鑑賞」は3～7%以下と最も低い。
- ⑤ 美術館の年1回以上の利用が最も多いのは4年生（54%）、最も低いのは1年生（31%）、教師側の「全く利用しない」は66%
- ⑥ 60%近くの児童の家に自作作品が飾られている。
- ⑦ 自作作品の保存状況はよい。（「すべて」「気に入ったものだけとってある」を合わせて63～77%）
- ⑧ 全作品を展示93%
- ⑨ 教師が展示をする56%
- ⑩ 展示効果は高いが、学年が上がるにつれ「作品によっては飾ってほしくない」という意識が高くなる。
- ⑪ 鑑賞の授業はこれからの生活に大切だと思っている児童が多い。教師は生涯学習の工夫にあまり意識がない。
- ⑫ 資料はほとんど「教科書」を利用
- ⑬ 「諸外国の表現」についての題材設定が少ない。
- ⑭ 教師は「感性・情操」の不足を感じている。
- ⑮ 教師の課題意識では、「児童制作作品のみの鑑賞会になりがち」「評価しにくい」「知識不足」が多く挙がっている。
- ⑯ 個々の作家を取り上げた題材設定が少ない。
- ⑰ 市内児童生徒作品展の鑑賞について、カリキュラム上ではあまり扱われていない。

【 中学校 】

- ① 知っている作家・作品の幅がない。
- ② 「好きな作家・作品がない・ない」が多い。
- ③ 鑑賞することへの興味は高い。
- ④ 美術館の年1回以上の利用は41～45%、教師の「全く利用しない」は48%
- ⑤ 高まったと感じる力の中で「身の回りのものや生活の中に、美しさや機能を生かすようにしている」が最も少ない。
- ⑥ 半数近くの生徒の家に自作作品が飾られている。
- ⑦ 自作作品の保存状況はよい。
- ⑧ 作品展示は、教師が「意図によって選んだもののみ展示」が多い。
- ⑨ 展示方法は「教師の展示」が多い。29%は生徒と一緒に企画展示している。
- ⑩ 展示効果は高いが、「作品によっては飾ってほしくない」という意識も高い。
- ⑪ 鑑賞の授業は、これからの生活に大切だと思っている生徒は多い。
- ⑫ 主な資料は、資料集、教科書、映像
- ⑬ 「日本の美術」への取組が多いのに対し、「知っている」や「好きな」日本の作家・作品が少ない。
- ⑭ 教師は「鑑賞の能力」では「興味・関心」の不足を感じている。
- ⑮ 教師の課題意識では「時間が少ない」「教材準備の手間」「知識不足」「評価しにくい」が挙がっている。
- ⑯ 個々の作家を取り上げた題材設定が少ない。
- ⑰ 市内児童生徒作品展の鑑賞について、カリキュラム上ではあまり扱われていない。

（３）題材例・参考資料などのデータ収集。研修員による授業実践例

題材例の参考資料として、過去の鑑賞授業の実践例や研究資料のデータ収集を行った。また、題材例に組み込む一つの事例として、研修員によるタイプの異なる鑑賞の授業実践に取り組んだ。

授業のタイプは、

【題材例等の資料：ここをクリック】

- 1) カリキュラム上に題材（単元）として組み込まれている独立した鑑賞学習
- 2) 表現との関連を図った鑑賞学習
- 3) 環境（学校や地域など）を生かした鑑賞学習

という設定である。対象の作家や作品、ワークシートの一部を入れ替えて利用することができる授業構造をめざした。ここでは、1)の指導案と、2)・3)それぞれの略案を提示する。

研修員による授業実践例

タイプ1) 独立した鑑賞学習

伊藤若冲の動植綵絵

中学校3学年

(2時間)

1 題材設定の理由

伊藤若冲(1716~1800)は、京都に生まれた江戸時代中期の画家である。彼の生家は錦小路の裕福な青物問屋であったため、若冲はいわゆる絵を売って生活する職業画家ではなかった。自身も「私が絵を描くのは売るためなのではなく伎倆を高めたいからだ。」と言っているほどである。その若冲が40代のほぼ10年間をかけて描いたのが『動植綵絵』である。動植綵絵は全30幅の連作であり、絹本着色の技法で描かれている。ちなみに動植綵絵とは動植物を描いた彩色画のことである。

鑑賞の授業で作品や作家を扱うとき、我が国の優れた美術作品について学習することは少ない。若冲の動植綵絵の表現方法は写実であり、題材も身近なものが多く平易であることから、日本美術における絵画表現を学ぶことの入り口として本題材を設定した。

2 題材の評価規準

B 鑑賞	美術への 関心・意欲・態度	作者の経歴や生い立ち、制作の意図を知り、作品に見られる美しさや面白さを感じ取ろうとする。
	鑑賞の能力	作家としての姿勢や作品の制作意図を知り、作品に見られる美しさや面白さを感じてレポートにまとめ、発表することができる。また友人の意見や感想を聞き、自分の考えを深めることができる。

3 指導と評価のポイント

題材設定の理由で述べたように、今回の題材を、「先人が築き上げてきた日本文化の中での絵画表現はどのようになされてきたか」を知るための入り口としたい。それは動植綵絵の表現方法が写実であり、描かれている対象も比較的わかりやすいものだからである。また若冲の作品は、フランスの美術批評家エルネスト・シュノーが述べているように、日本美術の5つの特性「思いがけない構図」「巧妙な形態」「豊かな色彩」「絵画的効果の独創性」「絵画的手段の単純さ」を満たしているからである。

先日の修学旅行での宿舎が、若冲の生家に程近いことなどから興味をもたせつつ、作者の作家としての姿勢や作品の美しさ、面白さを感じさせながら授業を進めていきたい。

4 準備 【教師】

- ・動植綵絵全30幅の実物大複製
- ・動植綵絵についてのワークシート
- ・生徒用参考資料(動植綵絵30幅 釈迦三尊像 関連地図 などのプリント)
- ・参考図版(画集 解説本など)
- ・錦小路 相国寺についてのビデオ
- ・ビデオデッキ
- ・テレビモニター
- ・展示用ボード
- ・ホワイトボード
- ・マジックペン
- ・マグネット

【生徒】

- ・筆記用具
- ・美術資料集

5 学習の展開(指導と評価の計画)

(2時間) 関2:鑑賞

関:美術への関心・意欲・態度

鑑:鑑賞の能力

時間	ねらい・学習活動	題材の評価規準		指導上の留意点
		関	鑑	Cと判断する子への指導や支援
1時間目 20	・教室に展示してある30幅の動植綵絵を鑑賞し、印象や感想を述べる。	関	鑑	・先入観なしに作品を鑑賞させ、気づいたことや感じたことを述べさせる。
			評価方法 Aとするキーワード	
			鑑賞、発表の様子、ワークシートへの記入	
			A. 意欲的な態度・姿勢	

10	<ul style="list-style-type: none"> 動植綵絵とはどのようなものなのかを知る。 	<p>関</p> <ul style="list-style-type: none"> 動植綵絵とはどのようなものなのか、興味をもつ。 <p>話を聞く姿勢、ワークシートへの記入</p> <p>A. 意欲的な態度・姿勢</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教室に展示されている作品や資料を見ながら話す。 <p>C. 展示されている作品を示しながら、写実的に描かれていながら面白い部分（気になる部分）を発見させる。</p>
10	<ul style="list-style-type: none"> 若沖の生家があった錦小路と、若沖ゆかりの寺である相国寺のビデオを見る。 	<p>関 鑑</p> <ul style="list-style-type: none"> 修学旅行で宿泊した場所の近くに若沖の生家があることや班行動で見学した京都市内に若沖ゆかりの寺があることを知り、興味をもつことができる。 <p>ビデオを鑑賞する姿勢、ワークシートへの記入</p> <p>A. 意欲的な態度・姿勢</p>	<ul style="list-style-type: none"> 修学旅行での活動に関係づけながら、ビデオを鑑賞させる。 <p>C. 宿舎を出発するところからビデオを始め、コメントを加えながら鑑賞させる。</p>
10	<ul style="list-style-type: none"> 伊藤若沖の経歴を知る。 	<p>関</p> <ul style="list-style-type: none"> 伊藤若沖の経歴や作家としての姿勢に興味をもつ。 <p>話を聞く姿勢、ワークシートへの記入</p> <p>A. 意欲的な態度・姿勢</p>	<ul style="list-style-type: none"> 資料を使い、伊藤若沖の経歴や作家としての生き方や制作に対する姿勢を話す。
2時間目 20	<ul style="list-style-type: none"> 再度展示してある動植綵絵全30幅の中から、気に入った作品1点を選び、ワークシートに印象（作品を見て気づいた点等）や感想を書く。 	<p>関 鑑</p> <ul style="list-style-type: none"> 再度展示してある動植綵絵30幅の中から、気に入った作品を1点選び、作品の美しさや面白さなどを感じて感想を書くことができる。 <p>作品を鑑賞する姿勢、ワークシートへの記入</p> <p>A. 意欲的に鑑賞して、作品の美しさや面白さなどを発見しワークシートにまとめている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 美しさや面白さの具体例を示しながら感想を書かせる。 <p>C. 個々の作品に描かれている内容の特徴や作者のねらいなどについて、アドバイスをする。</p>
30	<ul style="list-style-type: none"> 自分が気に入った作品の印象や感想を発表し、互いに意見を交換する。 	<p>関 鑑</p> <ul style="list-style-type: none"> まとめたワークシートの内容をもとに、自分の感想や印象を発表することができる。また、友人の感想や印象を聞き、自分の考えを深め、意見を交換することができる。 <p>発表する姿勢、発表を聞く姿勢、ワークシートの内容</p> <p>A. 自分の感想が伝わるように発表する。また、多くの生徒が気づかない部分まで指摘し、話し合いを深めることができる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> まとめたワークシートの内容をもとに、自分の感想や印象を発表させ、生徒同士で意見を交換させる。 <p>C. 意見の交換では、素朴な疑問でもかまわないので、積極的に発言させる。</p>

6 指導と評価の一体化（考察）

修学旅行の宿舎から若沖の生家があった錦小路まではわずかの距離である。当日、何とか時間を見つけてその錦小路を取材し、当時とは様子が違うとはいえ市場の活気を感じることができたのは嬉しかった（若沖が動植綵絵を寄進した相国寺にも行くことができた）。

ここ数年、3年生の鑑賞の授業では「伊藤若沖の動植綵絵」を学習しているが、今回初めて動植綵絵の複製30幅を実物大で展示してみた。資料を作成するのは大変だったが、生徒は実物大ゆえの迫力等を感じることができたようだ。この点で実物大のものを鑑賞することの効果があったといえる。このことは、日本的な絵画表現に改めて興味をもった生徒がいたことからもうかがえる。

若沖の作品を題材に選んだのは、作品のテーマがわかりやすいこと、若沖ゆかりの場所が修学旅行で訪れる京都に集中していること、動植綵絵そのものは現在東京で見ることができる、などの理由からである。「先人が築き上げてきた日本文化の中での絵画表現はどの様になされてきたか」を知るための入り口として、今回の題材は生徒にとって比較的受け入れやすいものであることを考慮し、授業が教師の一方的な知識の注入ではなく、作品の美しさや面白さ、造形要素などを生徒自らが感じて楽しめるものにできればと考える。

タイプ2) 表現との関連を図った鑑賞学習

題材名	コロコロ コロガラート ～コロコロめいろ～		学年	小学校 中学年	時間	8
授業様式	授業タイプ	鑑賞方法	作品活用方法		場 所	
	鑑賞と表現	・複数作家作品 ・実物素材の提示 ・友達の商品	全体(鑑賞・体験) →部分(鑑賞・遊ぶ)		教室 図工室	
目 標	(1) 既存の作品や身近にある様々な素材などから、表現のおもしろさや工夫を発見し、迷路づくりに興味をもとうとする。 (2) 様々な気づきからおもしろい転がり方のしくみを考えようとしている。 (3) 身近にある楽しい動きのものや友達の作品などからよさや工夫に気づき、自分の表現に生かそうとする。					
展 開	① 既存の作品や市販の玩具などで鑑賞したり遊んだりして、そのよさやおもしろさについて話し合い、表現のおもしろさや工夫を発見する。 ② どのようにしたら楽しい転がり方をするか考え、アイデアスケッチを描く。 ③ アイデアスケッチをもとに、工夫してつくる。 ④ 制作途中の互いの作品で遊んだり、鑑賞しあったりして制作に生かす。 ⑤ できあがった作品で遊び、互いの作品の鑑賞をしながら、よさや工夫しているところに気づく。					
準備・資料等	【児童】 箱、ダンボール、はさみ、ボンド、プリンカップなどの容器、フィルムケースなど 【教師】 画用紙、色画用紙、ボンド、カッター、カッターマット、プリンカップなどの容器や箱など多少用意しておく 既存の作品 { エッシャー「滝」「上昇と下降」「相対性」、迷宮庭園などの写真 イタリアの庭園(教科書) など } 市販の玩具、参考作品(ジェットコースターの映像など)					
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・既存の作品や市販の玩具などで鑑賞したり遊んだりする中で、迷路の形(四角だけでなく丸い形)階段や塔、道順などを発見して作品をつくる意欲を高める。 ・教科書の参考作品や身近な素材を見て、どのような材料が使われているかを知り、材料集めのヒントにする。 ・作業がスムーズに行えるように、材料の効果的な接着の仕方などを指導する。 ・制作の過程でも互いの作品を見合ったり、遊んだりする時間を設け、互いのよさを感じたり、取り入れたりできるようにする。 ・導入で使った既存の作品や市販の玩具などは、いつでも参考にできるように教室内に掲示及び展示する。 ・できあがった作品で遊ぶ時間を設けて、できるだけ多くの作品からよさや工夫した点などを実感することができるようにする。 					

タイプ3) 環境(学校や地域など)を生かした鑑賞学習

題材名	太郎さんこんにちは ～12歳の自分～		学年	小学校 高学年	時間	12
授業様式	授業タイプ	鑑賞方法	作品活用方法		場 所	
	鑑賞と環境	・同作家の複数作品 ・美術館鑑賞 ・友達の作品	・鑑賞遊び ・ギャラリー・トーク ・校内展示		教室 美術館 多目的スペース	
目 標	(1) 作品から感じたことを自分なりの言葉で話して共有する。 (2) 美術館での鑑賞マナーを身につける。 (3) 鑑賞と表現の一体化により、作品を深く味わうことを通して表現の幅を広げる。 (4) 形や色で表すことを楽しもうとする。 (5) 鑑賞を通して、自分自身の表現を考える。 (6) 環境について考え、自分たちの作品を協力して展示し、環境を整えることができる。					
展 開	① 鑑賞遊び 作品カードを使ってできるゲームを自分たちで考え、実際にカード(岡本太郎美術館貸し出し)で遊びながら作品に親しむ。 ② 岡本太郎美術館でグループ別鑑賞活動(美術館との連携によるギャラリー・トーク) ③ 形や色による表現の学習(色紙をはさみで切り、パーツの形や色を組み合わせて表現する。) ④ 「12歳の自分」をキャラクターとして表現する。(②③の学習を生かす) 段ボール紙(模造紙大)にキャラクターを描き、着色して切り抜く。 ⑤ 友達の作品と合わせた共有の世界を表現する。(②③の学習を生かす) ⑥ 環境について考え、自分たちの生活環境と制作した作品の調和を考えながら協力して作品展示をして、環境を整える。 ⑦ 展示した作品を鑑賞し、感じたことなどを自分なりの言葉で話す。 友達の話聞いて理解し、思いを共有する。					
準備・資料等	・作品カード(岡本太郎美術館貸し出し) ・ワークシート(ゲーム用・美術館鑑賞用) ・美術館見学のしおり ・見学準備(事前指導・美術館との打ち合わせ) ・色紙 ・段ボール紙(模造紙大) ・段ボールカッター ・絵の具 ・はけ ・模造紙					
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞のポイントをルールに盛り込んだゲームを設定する。 ・美術館側と打ち合わせを行い、表現から個々の感じたことが中心となるギャラリー・トークを設定する。 ・鮮やかでカラフルな色紙を用意して、表現の幅を広げるようにする。 ・鑑賞で感じたことを生かして形や色を考えるように話す。 ・作品展示では、自分と友達の作品(キャラクター)との配置に目を向けて、全体のバランスを考えさせる。 ・自分たちの作品を生かした環境づくりから、生活環境に果たす美術の役割について考えさせる。 					

研究授業、題材例などのデータ収集からの考察

題材例の参考として、市内を中心に過去に図画工作・美術科で発表された鑑賞授業の実践例を収集したが、やはり授業実践の本数がかなり少ないことがわかった。これらの資料がデータベース化され、本研究会議で提示するモデル表の実用性を高めていくことが今後の課題となる。[モデル表Ⅵへの適用]

研修員による授業実践例では、①発達段階、②鑑賞タイプ、③部分を変えて利用できる授業構造の3つの視点を中心に授業を組み立てたが、③については、さらに活用しやすくなるよう研究していく必要がある。

タイプ1)では、学校行事に関連させ、実際に作品や作者にまつわるものを見たり感じたりしたことを生かすことのできる学習内容を設定し、教師の一方的な知識の注入になりがちな、個々の画家や作品についての解説的鑑賞学習に陥らないように工夫した。また、実態調査結果で示された「個々の画家を取り上げた題材が少ない」「『日本の美術』への取組がある程度多いのに対し、日本の『知っている』や『好きな』作家や作品が少ない」などの課題にも対応している。行事と組み合わせることができる機会の少ない実状では、授業例のように実物大の複製を用意する方法も効果的である。しかし、このような専門性の高い授業やそれに伴った教材を扱う機会が多い中学校では、調査結果〔教師⑨参照〕にも現れているように「教材準備に手間がかかる」という鑑賞授業の課題があり、教材準備に必要以上に手間のかからない工夫をしていかなければならない。鑑賞教材の準備に関する問題は、著作権や図版、視聴覚資料などの鑑賞教材の質、教材作成にかかる費用など多岐にわたり、鑑賞の授業に対する教師の姿勢を消極的なものにしてしまう。

こうした課題については、教材の共有が可能となるシステムや設備の整備、データベース化の促進など、個々の教師の取組をサポートする体制づくりが必要である。

タイプ2)は、消極的になりがちな鑑賞授業を「表現との関連を図った鑑賞学習」の題材設定により充実させていこうとする一例である。どの表現題材にも活用できる授業構造をめざしたが、制作のための意図的な提示をする「参考作品」の扱いと、作家や作品と深く関わる「鑑賞学習」の扱いを混同しやすいという課題がみられた。モデル表Ⅰ・Ⅱに示した「発達段階に即した身につけさせたい鑑賞の能力」に照らし合わせ、「鑑賞学習」としての題材設定や資料活用の視点を深めていくことが必要である。

タイプ3)は、美術館と連携した実践例である。岡本太郎美術館では、小学生でのグループを対象としたギャラリー・トークは初めての試みであり、興味深い実践となった。子どもたちの鑑賞の様子は生き生きとし、作家や作品に親しみ、鑑賞を楽しみながら興味や関心が高まっているという確かな手応えを感じさせるものであった。今後このような実践を活発に行っていくために、さらに連携を深めていくことが望まれる。この題材では、①鑑賞遊び②美術館での鑑賞学習③形と色の学習④表現活動⑤環境学習などの複数の題材を組み合わせている。学年ごとに発達段階に応じて、鑑賞のみや必要な題材のみを選択して活用することもできる。

このような授業実践例については、鑑賞学習を推し進めていく入り口に立つ題材として位置づけられるのではないかと考える。

(4) 資料提示の構想

発達段階に応じた系統的なカリキュラム作成のための資料提示の構想

研究方法(1)から(3)の取組を踏まえ、Ⅰ)学習指導要領:鑑賞の目標、Ⅱ)発達段階に応じた身につけさせたい「鑑賞の能力」(造形活動における子どもの発達段階を踏まえた鑑賞教育の目標レベルと活動例¹⁾を活用)、Ⅲ)アンケートと年間指導計画の調査の分析結果による小・中学校別課題、Ⅳ)分析結果からの発達段階別課題、Ⅴ)発達段階別課題への具体的手立て、Ⅵ)発達段階と課題の対応に即した題材例、Ⅶ)題材例のねらい、Ⅷ)川崎市の特色を生かした鑑賞学習のための参考資料、Ⅸ)Ⅷ)の活用のための発達段階を考慮した利用ポイント、などを一覧表にまとめた。そして、発達段階に応じて求められる鑑賞の能力とその具体的手立てなどが共通理解できるとともに、全体の構造がとらえられるような表の作成をめざして、系統的なカリキュラムの作成のためのガイドラインの役割を果たせるように構想した。

さらに、義務教育期間において作家や作家作品を少なくともどの程度扱うべきかの見当がつかない現状に対する手立てとして、合理的かつ効果的に作家や作家作品を扱う目安となるよう、認知度の調査結果を前述の表と併せて一覧表で提示した。【p.94 表A】

なお、「表現」分野の制作活動における作品の鑑賞はほとんど行われていると判断し、本研究では、作家作品を中心とする鑑賞学習についてのモデル表を作成した。

¹⁾ 新井哲夫『図画工作・美術科における鑑賞授業モデル及びプログラムの開発に関する研究』(平成12~14年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)研究成果報告書), 2003年 p.8

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究を通して見えてきたこと

本研究では、川崎市の鑑賞学習の実態と課題を明らかにしていく過程から、鑑賞の授業が積極的に取り入れられることで、図画工作・美術科の多くの課題は解決可能であることが見えてきた。また、時間数の削減などによる取組の困難さも、本研究において試作したガイドラインを活用して、内容の重なりや系統性の押さえのない題材を整理することにより、合理的かつ効果的にカリキュラムを組み立てていくことで改善の方向に進むことが期待できると考える。

積極的な鑑賞の授業への取組がなされるためにどのような手立てや方向性が必要なのか、モデル表の作成とともに見えてきたことについて次のようにまとめる。

【鑑賞教育を高める工夫】

- ・ 鑑賞の意義を理解し発達段階に即した鑑賞の授業を組み立てるとともに、作家や作品、鑑賞すること自体を「好き」となるような学習内容を追求する。
- ・ 鑑賞の能力を高めるためには、日常生活の中での鑑賞環境を整えることも大切である。児童生徒と共に作品展示の企画や展示活動を推進していくとともに、児童生徒の制作作品の他、工芸品、彫刻、ポスター、写真など様々なものが鑑賞の対象であることを日常的に学べる環境づくりに取り組む。
- ・ 美術館等との連携により、本物のもつ力と向かい合い、作品との対話による鑑賞の楽しさを味わう体験をさせる。また、鑑賞のマナーやものを大切にすることをはぐくみ、生涯学習につなげることを工夫する。

【カリキュラム作成に当たって】

- ・ 鑑賞する作品は、できるだけ幅広く出会えるようにカリキュラム編成時に工夫する。また、「見たことがある」「知っているよ」といった声が出ることをめざすとともに、美術への親しみや好感を高める。
- ・ 小学校1年から6年生までに、どのような作品とどれくらい出会えるようにするかを教師同士で話し合う。また、小学校と中学校の引き継ぎを行い、学習内容を把握することで、重なりや不足を生じないようにする。
- ・ モデル表と組み合わせて、児童生徒の制作した作品による鑑賞会を効果的に編成する。
- ・ 鑑賞と表現の一体化による授業の研究を推進し、限られた時間の中で、相乗効果による感性や創造力の高まりを求めるとともに、カリキュラムに表現題材の設定が偏る傾向を改善する。

【授業取組の具体的手立て】

- ・ 鑑賞の授業に対して、知識不足(複数回答:小学校 41%、中学校 34%)を感じていたり、どのような授業をしてよいのか悩んだりしている(複数回答:小学校 27%、中学校 20%)といった苦手意識のある教師は、ギャラリー・トーク(対話型美術鑑賞)などの手法を身につけることで、積極的に取り組むこともできる。一例として本研究会議では、1984～96年までニューヨーク近代美術館の教育部講師であったアメリア・アレナスのギャラリー・トークを紹介する²⁾。基本質問の「これは何だろう?」「何が起きているのだろうか?」という問いから始める。子どもの答えに対しては、「何を見てそう思ったの?」「どうしてそう思ったの?」と根拠を尋ねていくというシンプルなものである。アメリア・アレナスは、観察から発見と判断、思考から表現という過程に働く様々な力が人々との対話を通して育つことをねらっている。「対話」を最も重視しているため、「知識面」や「手立て」が課題となっている場合、こうした手法を手がかりに鑑賞の授業を行うことは有効な方法と考える。また、「対話」は学校における鑑賞教育の重要な特色である。
- ・ 参考作品と鑑賞作品について、活用目的をはっきりと認識し、混同して扱うことのないようにする。また、鑑賞作品が同時に参考作品となる場合においても、その意図やねらいが明確になるように組み立てる。
- ・ 児童生徒の制作作品による鑑賞会では、作者本人がいる鑑賞学習のよさを生かして、制作の意図や作品への思いを共有できる授業となるように工夫する。
- ・ 鑑賞の授業から高まったと感じる力について、児童生徒と教師の認識との間に差が見られる一つの要因として、「鑑賞の評価がしにくい」(調査[教師]⑨参照)という回答が多かった教師側の課題が挙げられる。まず、評価方法の一つとして授業例に示したワークシートやアドバイスカードなどの活用を進めることも考えられる。

²⁾ 上野 行一 監修 『まなざしの共有 アメリア・アレナスの鑑賞教育に学ぶ』 淡交社 2001年

2 今後の課題

提示したモデル表は、①鑑賞授業例の授業実践とそのデータベース化、②鑑賞教材の資料や映像、実物や実物大の複製教材などを共有できるシステムの構築、それに伴う物理的課題の解決や環境整備、③美術館等と学校との連携の推進などに取り組み、その成果を本研究に組み込むことでより実用性が加わり、活用しやすいものとなる。また、小・中学校が共通理解を図りながら、連携してどのような方法で進めていくのかなどについても検討していかなければならない。このような問題をどのように解決していくかが今後の大きな課題となる。

具体的には、①では、鑑賞授業の実践をまとめ、ネットによる配信が可能となるようにする。②では、各教師が開発した鑑賞教材で「共有可能な教材」を①と同様にデータベース化することや、サーバーで保管し、貸し出せるようなシステムを構築する。さらに、その他の既成の資料や映像、実物や実物大の複製教材など、個々の教師では準備や保管の難しい教材を共有できる環境整備を行うことなどが考えられる。③については、学校教育と川崎市の生涯学習とが連携してのプログラムづくりなどが求められる。そのようなプログラムによる鑑賞学習の場を子どもたちに与えられることにより、大きな循環が生まれ、市民全体に豊かな教育効果を広げていくことに繋がる可能性をもっていると考えられる。このような実践は他県や海外の美術館などでは、既に行われており、今後、川崎市においてもこのような教育ビジョンを具体化し、推進していくことが必要であると考えられる。

このように鑑賞教育を行っていく上での課題は多い。本研究では「発達段階に即した系統的なカリキュラム編成」のための、ガイドライン的役割となるものの作成をめざしてきたが、課題解決の入り口を示したに過ぎない。今後この研究をさらに進め、提案に基づいて検証していく中で、より実践的な鑑賞学習の在り方を追求していく必要がある。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- V・ローウェンフェルド(竹内 清・堀内 敏・武井 勝雄訳)『美術による人間形成』黎明書房 1985年
泉谷淑夫『鑑賞教育の実践一見る喜び・知る楽しさ一』開隆堂 1995年
新井哲夫『造形活動における子どもの発達の特性を踏まえた鑑賞教育の方法論に関する研究』
(平成 8～10 年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書) 1999年
上野行一 監修『まなごしの共有 アメリア・アレナスの鑑賞教育に学ぶ』淡交社 2001年
遠藤友麗 編著『新しい時代の学力づくり授業づくり中学校美術科編B鑑賞評価』明治図書 2002年
新井哲夫『図画工作・美術科における鑑賞授業モデル及びプログラムの開発に関する研究』
(平成 12～14 年度科学研究費補助金 基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書) 2003年
宮脇 理 監修/新井 哲夫・天形 健・山口 喜雄 編著『小学校図画工作指導の研究』建帛社 2005年

【指導助言者】

群馬大学教育学部教授	新井 哲夫
川崎市立中学校教育研究会美術科部会長 (川崎市立中原中学校長)	呉羽 一彦
川崎市立小学校図画工作科教育研究会長 (川崎市立登戸小学校長)	平野 英雄
川崎市立菅生中学校長	金井 則夫
川崎市総合教育センター指導主事	行川 博幸

【研究に関する資料データ：右をクリック】 アンケート結果 資料 モデル表